20周年記念特集号

芸振

大分県芸術文化振興会議会報

もくじ

芸振20周年を
ふり返って――挾間　正年 … 1
特集　文芸・美術 … 2
特集　音楽、舞踊 … 3
特集　地域文化・能楽・
生活芸術 … 4
特集　演劇・文化財 … 5
20周年記年行事によせて、
文芸講演会、狭間久 … 6
同、オペラ蝶々夫人、加藤公康 … 7
同、日舞古典芸能観賞会、永松秀敏 … 8
同、第20回県美展、仲町議吉 … 9
同、演劇、宇佐八幡炎上、尾登一信 … 10
同、民謡、ふるさとのうた、加藤正人 … 11
園田高弘ピアノリサイタル・帆足杏雨展 … 12
県内の文化施設、杵築市民会館・大分の文化財 … 13
県芸術祭20周年のあしあと … 14、15
れんさい、スバルと人(4)文化ニュース、編集後記 … 16

発行人・挾間正年　　編集人・高塩　至

No.63　59・12

芸振20周年を迎えて

大分県芸術文化
振興会議
会長　挾　間　正　年

今年は大分県芸術祭が発足してから20周年を迎えた記念すべき年であります。今日にいたるまで県芸術祭発展にご尽力いただき、育ててくださった関係者の方々に心から感謝を申し上げる次第であります。

かえりみますと昭和40年10月、別府国際観光会館で第1回県芸術祭の開幕記念行事に立川清登氏を迎えて、感激的な200人の大合唱団による「森の歌」の全曲合唱で開幕して以来、舞台芸術に、展示芸術に、文芸・生活文化と毎年県芸術祭を発表の場として意欲的に展開されてきました。

20年を経た今日、内容の向上も目ざましく、特に郷土を素材とした創作芸術の気運を生み、芸術性の高い大分文化の基礎を築くとともに、鑑賞する芸術祭から創造する芸術祭へと発展してまいりました。一方文化団体による参加行事も第1回当時は23件と記録され、20周年を迎えた今年の参加行事は123件と新記録をつくり、県民文化の質的向上とともに県民文化の意欲がうかがわれるものであります。

去る10月1日に開催された記念式典の大きな意義は、県芸術祭に結集した先輩諸氏の輝かしい歴史と伝統のあゆみに対して感謝を申し上げると同時に、県芸術祭が単に伝統的な基盤に安住するだけでなく、個性ゆたかで国内はもとより、国際舞台においても評価にたえうる洗練されたものに成長していくことをあらためて問いかけることであろうかと思います。

田川　奨（県日本画部会長）

さいわい、県芸術文化基金も平松大分県知事をはじめ、県民各位のご協力により3億円の目標達成を目前にひかえており、完成の暁には各方面のご意見をいただきながら、県民総参加を目ざした芸術文化活動の実現のため公平かつ適正な運営を図っていく必要があろうかと考えているところであります。

おわりになりましたが関係各位のこれまで以上のご支援、ご協力を願いながら、20周年のごあいさつとします。

特集 芸振20周年をふり返って

文　芸

佐々木　均太郎

県芸振会議が発足した昭和40年当時、文芸部門でいちはやく参加したのは大分県歌人クラブであった。それまで着実な歩みを続けていた県下短歌同人誌「朱竹」「八雲」「歌帖」などを合流させて芸術祭短歌コンクールを創始した功労者鶴見英之もすでに故人となられた。

小説では、昭和44年に「豆腐屋の四季」で一躍作家としてデビューした中津の松下竜一が出て、県下の文芸活動がにわかに活気を呈してきた。さらに、昭和46年には臼杵市出身の女流作家野上弥生子が文化勲章を受章され、潜在していた県内の文芸志向の気運はいよいよかきたてられた。

野上は今年99歳、まだまだ現役作家として毎日原稿用紙２枚を綴られておられるという。こうした触発があってか、昭和48年の九州沖縄文学賞の最優秀賞に別府の小郷穆子の「遠い日の墓標」が選ばれ気炎があがった。小郷は、その後も書き続け昭和58年には３冊目小説集「ガラスの階段」を刊行、第15回「九州文学賞」を受けた。小説部門では、矢野一也（大分市）、古岡孝信（中津市）、村上秀夫（別府市）などが根気強く創作活動を続けているのがたのもしい。

詩は、首藤三郎主宰「心象」が広く県下に同人を持ち継続されている。日本現代詩の先駆的役割を果たした詩誌「亜」の中核であった滝口武士は、戦後郷里国東半島の武蔵町で教員をされていた。昭和56年日本現代詩人会の「先達詩人」彰を贈られたが、遺集となった「道」を最後に昭和57年５月病没されたのは県詩界にとっての大きな痛恨事であった。

短歌界では、歌誌「歌帖」が「短歌年鑑」1978年版の全国第１位のランクをとった。しかし、昭和52年県歌人の大先達浅利良道が物故し、巨星堕つの感を深くした。

俳句界では、昭和47年に故高野素十の正統後継誌とし創刊した俳誌「蕗」（倉田紘文主宰）は、外国を含め２千名以上の誌友を擁し、おしもおされぬ全国十指に入る威容を誇り、俳人紘文は昭和年代の代表作家としてその実力は高く評価されてきている。

口語自由律俳誌「虹波」は、昭和47年に主宰者津田露色の逝去があったが、息女露が継承し着実な歩みをつづけている。川柳部門も今年で第20回の大会を催し、いよいよ隆盛に拍車をかけている。

昭和47年「大分の民話」を出版した土屋北彦は、次々と続刊し第４集がこのほど完成した。偕成社刊の「大分県の民話」シリーズは、59年度毎日出版文化賞をもらった。

創作童話「北国の少年」で、このほど日本児童文学者協会「新人賞」を受賞した越智田一男の輝かしい業績も快挙であった。

本県の文芸界は、これから開花期を迎えるの感を深くする。

（大分大学教授）

美　術 ―― 県美協の20周年記念誌

菅　　久

ことしの第20回県美展は、県芸術祭の20周年と重なって一層華やかであった。芸術祭が40年から出発したのと同じように、県美協も40年に旧県美術協会と県書道協会、県写真作家協会の三者が統合して新生県美協が誕生した。

もともと美協統合問題は、県からの補助金が三者を一本の窓口として出されたことに始まる。しかもその金は少額で三者で配分するには不充分なことから増額を要求したところ、県は三者が一本になることを条件とした。

もう一つは美術館問題である。美術館建設運動を展開するにはバラバラの矢では力が弱い。３本が一緒になって力を充実させ、統合後は三者が一堂で展覧会をしようと話し合った。その頃は書協も写協も組織がまだ固まってなく会員も少数であった。

当時の美協委員長溝辺有巣氏は、県の指導により統合論に積極的で会議を何べんも開き、40年９月の三者合同委員会で一気に結論を出し、総会で初代会長に就任した。その後42年の総会で宮崎豊会長が選任され、つづいて52年に進来哲会長、56年浜田九一郎会長と20年目を迎えた。浜田会長によって執行された記念事業は大成功し、20周年の意義をみせたといえる。

今年は出品数も第一陣の書道展が芸館だけではおさまりきれず、第２会場の文化会館まで陳列して活況をみせ、２陣の写真展も今までにない多数が陳列され内容が充実、写真とは何かが論議された。最後の会期日洋彫工展はすでに芸館設立当時からパンク状態である。今年も会員は号数制限をし100号タテまで、それでも大作が２段掛けになるなど活気のある会場は観賞者でにぎわった。

三者の運動によって建設された芸館も、目標であった一堂で展覧会を開く夢はあくまで夢であり、現実は各部がだんだん太り、ますます大世帯になって運営も多難である。

さて、今回は記念事業の一つとして、こうした20年間の歴史と作品を集録した豪華図録を編集中である。三者それぞれ分冊とし（日洋彫工部と書道部は印刷終了）、三者共通の歩みをまとめた小冊子を含め４冊をケースに納め、来春早々には県や報道機関・関係市町村にも贈呈することになっている。大分県一の規模をもつ文化団体である大分県美術協会の記録が、これからの県美術界の発展や文化の向上に貴重な資料となり活用されることを祈る。

（県芸振理事・県美協記念誌編集委員）

特集 芸振20周年をふり返って

音　楽

山　本　勝　彦

早いもので芸術祭も20年経ちました。私も第１回から芸術祭に参加させていただいている。20回迄の思いを書くと、第１回の記念音楽会では、ショスタコービッチの「森の歌」を子供達から大人まで一丸となって演奏会を開いた。第４回音楽協会設置、県民オペラ「フィガロの結婚」を演奏、第５回大分県音楽協会演奏会、第６回ベートーベン生誕200年記念演奏会、第７回県民オペラ「カバレリアルスチカーナ」公演、第８回では県民吹奏楽の指導者として、ジェームス・バーダル先生を迎え、大分県の子供と大人までの吹奏楽の合同団体を指導され、子供達にとってはじめての外国人指揮者に接することが出来た。第９回県民オペラも地元の作品を作曲し「吉四六昇天」が演奏された。はじめは、どうなるかと心配もあったが、成功をおさめ、地方文化、又日本全国にアピールした。大分県音楽コンクールもこの年にはじまり今年で12回を迎えた。第10回は、大分交響楽団の定着した練習の成果を披露する開幕演奏会が行われた。この年は室内楽、ジョイントコンサートが少しずつ芽を出しはじめた。第11回は「吉四六昇天」の東京公演が実現し皇太子御一家のご観覧のもとで演奏し記念すべき年であった。　又大分市・別府市・佐伯市と各市に市民音楽祭が催されるようになった。　第12回は「大分県のうた合唱音楽の夕べ」を合唱連盟が中心となり壮大な合唱を演奏した。この年から芸術短期大学の音楽講座がもたれ、合唱第９をうたう会も発足した。ジュニアオーケストラ、ジュニアの合唱も誕生した。第13回には待望の芸術会館が完成し県の音楽活動が一段と飛躍した。第14回、再び県民吹奏楽が地元の作曲家による作品「大分地方の俗楽によるファンタジー」を演奏した。ジュニアオペラも誕生し、「チェロ弾きのゴーシュ」を演奏した。第15回は大分交響楽団15周年記念音楽会が催され、地元合唱団とオーケストラで遂に第９交響曲を全曲演奏した。この年は滝廉太郎生誕100年記念演奏会も盛大に行われた。第16回は15回に続き大分交響楽団の特別演奏会が行われ、大分県出身の清瀬保二の作品と辛島輝治氏のピアノでモーツァルトの協奏曲を演奏した。第17回は「吉四六昇天」の中国公演を行い日本ではじめての地方オペラが海外を渡った。又臼杵市出身の作詩家吉丸一昌記念演奏会も行った。第18回は大分県ジュニア・フェスティバルを行い、県下の少年少女合唱団が集まり、ジュニアの大合唱とオーケストラの演奏を行った。第19回は県民オペラ「コシファントッテ」を本格的に取り組み、芸術祭を盛りあげた。

今年で第20回を迎え「蝶々夫人」で幕をあけ、大分県出身のピアニスト園田高弘ピアノリサイタルで幕を閉じた。第１回からと比較すると演奏回数も増え、芸術祭期間中45～50回の演奏会がもたれ、現在では全部の音楽会を一人で聞く事は困難になってきている。20年経った現在定着した音楽会は、音楽コンクール協会演奏会、大分交響楽団、県民オペラ、職場音楽会、合唱祭、吹奏楽フェスティバル、第９演奏会、九州作曲家演奏会、芸館サマーコンサート、邦楽演奏会、民謡音楽会等、個人の演奏、又関係団体の充実した演奏会がもたれている。第21回芸術祭は更に深い内容を検討され、すばらしい行事にしたい。

（大分県音楽協会事務局長・大分県芸術祭運営協議会副議長）

舞　踊

笠　木　啓　子

大分県洋舞踊協会は、全国に先がけて、昭和35年に設立を見、その後、県下各地で毎年合同公演を開催、その他の活動は、協会員個々の自主的な公演、モダン・ダンス、クラシック・バレエ部門の舞踊コンクール上位入賞、外国から一線の舞踊家を招へい、バレエ講習会等の歩みの中で、質・量ともに発展を遂げながら、大分県芸術文化の向上に地道な努力が続けられている。

さて、昭和40年は大分県芸術文化振興会議の発足、第１回大分県芸術祭の開催、同時に「文化会館がほしい」という文化関係者の切実な願いをもとに、文化会館着工という歴史のなかで、県洋舞協も県芸術祭の夜明けから参加してきた。県洋舞協の主な活動は次のようなものである。

第２回県芸術祭では、芸術祭賞受賞、第７回県芸術祭では開幕行事を担当、県民バレエ「白鳥の湖」（全幕）を上演。

初めて、協会員の総力をあげての取組みには、非常に意義深いものがあった。この年に、県洋舞協は会長制を設け、初代会長に平瀬克美先生がご苦労なさり、組織の充実を図る。次に、第10回開幕行事に創作バレエ「朝日長者」を上演、初めて県内文化関係者の協力実現の年であり、協会員が総力をあげ、県舞踊界は大きな盛りあがりをみせた。

そして、また、第16回県芸術祭の開幕行事を担当、創作バレエ「おおいたの祭り」を上演、協会員が結集して、各ジャンルの方の協力を得て、意義深い舞台作りに成果をあげた（会長＝樋口愁枯氏）。

その他、共催行事としては、９回の参加活動を試みている。

これまでの県芸術祭行事に出演の若い舞踊人が、現在協会員として、また、中央バレエ界で活躍している姿にふれて、感慨無量である。

また、本年は、県洋舞協顧問の平瀬克美先生が、大分県芸術祭20周年功労賞、並びに大分合同新聞文化賞を受賞された事は、まことに喜ばしい限りです。

大分県芸術祭20周年をふり返って、県芸振は、県洋舞協活動の大きな力となった事は事実であり、県芸術祭の歩みが、開拓者的役割を果たして下さったことに思いを致し、県芸術祭の蓄積の上に今日の協会が、また、我々もあり得るという感が深い。

（大分県洋舞踊協会常任理事・笠木啓子バレエ研究所主宰・日本バレエ協会「南九州」支部運営委員）

特集 芸振20周年をふり返って

―地域文化―

片山覚自

大分県芸術文化振興会議発足20周年おめでとうございます。

佐伯文化振興会は昭和46年に、佐伯文化会館の開館を記念して、郡・市の文化団体の希望を募り、約40団体が加入して設立されました。

専門家とアマチュアの文化的共同体として組織され、共に協力しあって文化を創造していくことが約束されました。

しかし、それぞれの団体のエゴは一朝では無くなりません。ともすれば、次元の低い演芸会的な演じ物になりかかったり、協力体制をとろうとしなかったりと言うことがありました。

共通の目標とする主題を探しあて得なかったからだと思います。これを求めるために、会員の相互理解を深める話し合いを度々持つことにしました。そして試行錯誤を未だにくり返しながら現在に至っております。

発足して12年、どうやら会の特性にするべきものが見えてきたこの頃です。

それは、郷土を素材に、佐伯にこだわり続けようとする姿勢が、相互理解を伴って生まれてきたことでしょう。

これにあわせて、文化の原点とは何なのかも考え続けていきたいと思っています。

私は最近、ある小さな地域の人々から依頼を受け、そこの地区公民館で、琴の演奏と地唄舞の公演をしました。地区の人にとっては初めての試みです。解説をつけて進行しました。「むずかしいと思っていた邦楽と地唄舞は、こんなにも親しみ安く、感動的だったのか」との好評をいただきました。

質の高い芸術文化を、親しみ安い身近なものと感じてもらうためには、私たちの方から地域の中に、膝ふれあえる距離の人々の中に入っていかねばならないと、体感しました。誠に貴重な経験でした。

このことも、郷土の中で生き続ける地域文化の基本的な姿勢の一つだと思います。

加入している各団体が、それぞれでなすべきことの内容の考察と、活動の活発化を心がけていくならば、その集積が佐伯文化振興会の今後の歩みを、一層豊かにしてくれると思います。　（佐伯文化振興会会長・佐伯文化会館運営委員長）

―能楽―

広瀬良博

能楽部門が芸振に加入したのは、芸術会館の開館した昭和五二年である。

現在、県内に喜多・観世・宝生の各流派を中心とした約二、〇〇〇名の愛好者が、年間にわたって県下一円で励んでいる。これら愛好者の水準を高め、日本の伝統芸能普及のため、芸館の主催行事として、「芸館能の美鑑賞シリーズ」が五十四年からはじめられた。

第一回を、五四年一月二七日―観世流。第二回五五年一月二九日―喜多流。第三回五七年一月二四日―宝生流。第四回を五九年二月一九日―観世流。（おおいた高年者記念事業として企画）と続いて催されている。各流派の宗家を招いてのこれら演能会は、それなりの実績と普及活動に貢献している。よろこばしいことである。

文化庁では、「青少年のための伝統芸能普及活動」が企画され、毎年全国各地を巡回公演している。

大分でも、これからの若い人々のために、こうした企画が実施され、県内各地を巡回できたら素晴らしいと思う。目下、大分県では本年度の芸術祭の各行事が催されているが、各流派を越えた積極参加が望まれるところである。

―生活芸術―物から心の時代へ―

藤原嘉久

県芸術祭の始まった昭和四十年代の生活芸術はほとんど「稽古ごと」としてのものが多かった。以来十年間ほどは、さほど変化は見られなかったが、ここ数年来、生活芸術の傾向が様がわりを見せてきた。

従来のお茶やお花の形態から、教養、趣味、芸能、美術からスポーツまで、それぞれ個人のニーズに対応した多種多様なものになってきている。このことは企業や、新聞社等が催す文化教室、文化講座の盛況がもたらしたこともあると考えられる。

また、生涯教育が唱えられ社会教育の振興と共に市町村の文化団体組織も軌道にのり、生活芸術の分野で公演や、展示が盛んになったこともあげられる。つまり最近は生活にうるおいを求め、それを楽しむという物の時代から心の時代へと移行してきている。

これからの日常生活で文化活動は日増しに向上を見ると思われる。それだけに生活芸術の今後は新鮮な感覚と多様さが求められることであろう。

（県芸振事務局次長）

特集 芸振20周年をふり返って

演　劇

中　沢　とおる

限られた時間の中で、舞台空間に様々のこころみをとおしながら、生身の役者が人間の存在のあり方をドラマの中から問いかけるのが演劇である。芸術祭のスタートに遅れたのは、その重さのためであった。舞台空間に挑戦する演劇の様々な表現方法は、その方法手段において限定はない。芸術祭発足当初、移動性に軸をすえた「吉四六劇団」（主宰野呂裕吉）の軽演劇風スタイルは、華やかなオペラやバレーの舞台に隠れその視点を見失いがちであるが、オリジナルな点、県下を巡演し演劇の楽しさを普及した行動実績は大事な活動であった。

私たちの県民演劇は、第９回の芸術祭から登場した。「沈んだ島の物語」（４幕３時間）は参加行事として上演されたが、芸術祭賞を受賞し、つづく「大友宗麟」「宇佐耶馬台国女王卑弥呼」は共催・主催行事となり、ひきつづき芸術祭賞を受けた。以後、共催・主催行事をくりかえし毎年上演をつづけ現在に至っている。

どの作品も２時間から３時間におよぶ大作で、郷土の歴史・風土・人物に材を求めたオリジナルで、かつらを除くすべての面で手づくりであることに特色がある。劇団員にチケット売りを徹底させ、客席を埋める収益の底をはたいて、装置に衣裳に等々、一流のプロの舞台に負けない贅沢な舞台をつくりつづけてきた。スターはいなくても、演劇人としての専門的な力を身につけさせるため、演劇教室を開講し、堅実な演技力を持った演劇集団の形成に努めた。加えて、県下の第一線で活躍されている他ジャンルの方々からご協力をいただいてきたことも特色である。プラスアルファーを産みだすこの創作方法は、県下の創造活動にひろがり始めている。過去12年間の中で「大友宗麟」「白秋を恋した女」「炭焼長者臼杵石仏物語」そして今年の「宇佐八幡炎上」は、中央演劇界の注目を浴びた。

他劇団の芸術祭参加も近年始まった。参加することに意義はあるが、演劇創造活動の質が発展するよう、地域文化運動としての存在になりうるよう共に研さんすることが大切である。

（県芸振会議理事・県民演劇制作委員長）

文化財

後　藤　正　二

芸振会議発足の頃、全県組織の関係団体は、大分県地方史研究会のみであった。地域別には、佐伯史談会に代表される会が、数地域にみられる程度であった。

その後、高度経済成長の時代を迎え、開発のテンポは目を見張るものがあった。同時に文化財の破壊も大きく、折からの「歴史物ブーム」とも重なり、県下の各地にも郷土史や文化財関係の団体が誕生していった。

大分県地方史研究会は、昭和59年秋、発足30周年を迎え、東京大学教授で、中世荘園史の研究者である石井進氏を招いて公開記念講演会を開催した。機関誌『大分県地方史』は 115 号を数えている。本会には昭和40年代の終り頃から関係部会が次々に生まれている。大分県中世文書研究会に続いて大分県近世史研究会が、更に大分県古代中世史研究会、大分県近現代史研究会が発足している。

昭和58年には、地方史研究を地道に推進している者を選奨するため、「大分県地方史研究奨励渡辺基金」を設定し、全国的にも注目されている。

50年代になると大分県方言研究会、大分県民具研究会、大分県石造美術研究会、大分の石橋を研究する会など、文化財の諸分野に及ぶ会が誕生し、活動している。中でも石造美術研究会は、機関誌『二豊の石造美術』を刊行すると共に、石造美術に対する理解を広く求めるために、石造美術の絵ハガキを次々に出している。

各地域の団体では、歴史の古い佐伯史談会は、その後も着実な活動を続け、佐伯市・南海部郡での文化財の保存や史跡の顕彰は注目される。『佐伯史談』も 137 号に達している。大分市の大南地区文化財同好会も忘れられぬ団体で、『落穂』は31号を刊行している。近年発足の玖珠郡史談会の機関誌『玖珠郡史談』は、早くも12号を刊行している。中津の三保の文化財を守る会は 700 有余の会員を有し、ユニークな活動を着実に進めている。

県下に文化財愛護少年団が誕生したのは44年のことであり、現在は59団体と、全国一の団体数となっている。なお53年には大分県文化財愛護少年団連絡協議会が結成された。

（県文化財専門員）

特集 20周年 記念行事によせて

記念式典・文芸講演会

豪華な式典・満席だった講演会

大分合同新聞社論説委員・文化部長
狭間　久

大分県芸術祭20周年の記念式典は大変豪華で立派なものだった。〝豪華〟といったのは県知事、県議会議長、県教育委員長、県教育長といった行政・政治のトップが出席していたからだ。主催四者のうち、民間の芸振会長はいつも出席するが、あいにく病気のため欠席したのはさぞかし残念だっただろう。それにしてもこれまでの芸術祭の式典とは逆だな、と妙な感慨を覚えた。

知事とか議長、教育委員長、教育長らは日ごろ多忙な方だ。芸術祭の開閉幕とか受賞式などの式典には、そうそう顔を出す時間はないのだろう。だからこれまで20年間の芸術祭を見ても、行政や議会の長が顔をそろえたことはない。それだけに〝豪華〟に見えたのかもしれない。できればこれを機会にこれからは開閉幕や受賞式に気軽に顔を出して激励してほしいと思った。

夕方から県市町村会館で開かれた祝賀パーティーでも知事や県議が顔を見せて文化の重要性を説くスピーチをした。特に知事は挨拶の中で〝文化立県〟を宣言し、楽しく文化関係者と歓談していた。こういう光景もこの20年間を振り返ってみて、初めてのことだった。もっとこういう場があってよいのではなかろうか。

式後開かれたパーティー

功労者表彰

パーティーは無料で、出席者は招待者ばかりのようだった。そのせいか官庁・学校関係者の多いのに比べて文化団体関係者がいささか少なかった印象を受けた。知事・県議らが出席して文化関係者と話し合う機会だから、これからは文化関係者の出席を多くしてもらいたい。

もちろん、こういうパーティーを毎回県費で開けというのではない。会費を取ってもよいから出席者を広く募ってもらいたいということだ。

記念式典につづく文芸講演会は竹田市出身の飯尾憲士さんの文芸講演「人生を勇気もて落ちこぼれよ」だった。会場は400席ぐらい用意されていたが、ほぼ満員で、文芸講演会としてはまず成功ではなかったかと思う。

県芸術祭では舞台関係や美術関係は華々しく開閉幕を飾る行事を打つが、文芸関係はいつも地味でスポットが当たらない――といった不満の声が文芸関係者からよく出されていた。この不満の声にこたえるための文芸講演会だったが、これをきっかけに県下の文芸関係者が協力し合って、講演会なり、シンポジウムを開いてはどうだろうと思った。（芸振理事）

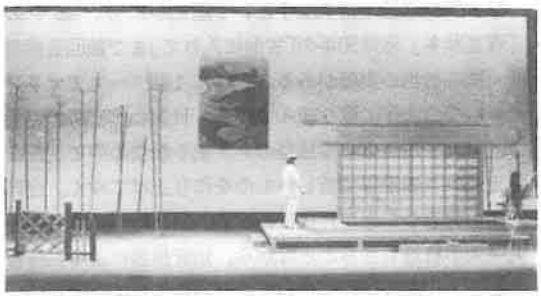
特集 20周年 記念行事によせて

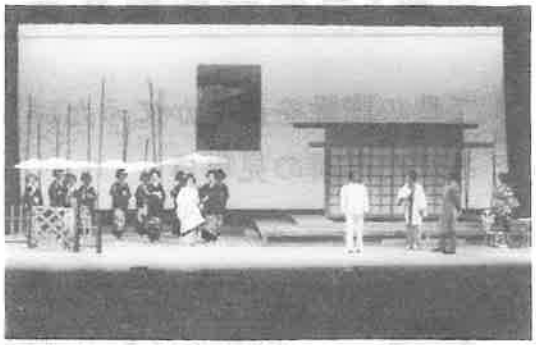
オペラ・蝶々夫人

芸術祭と共に成長してきた20年

大分大学教授・大分交響楽団常任指揮者
加藤公康

大分県芸術祭20周年という記念すべき年の冒頭を飾ってオペラ「蝶々夫人」を上演できた事を光栄に思っています。振り返ってみれば県民オペラが「フィガロの結婚」で旗上げ公演をしたのは昭和43年、第4回芸術祭の開幕行事の事でした。それから10数年、毎年上演するオペラはすべて芸術祭の行事として行われました。中でも第9回の芸術祭で超満員の大分文化会館で熱気と興奮の中に初演された「吉四六昇天」や第13回の新しくできた県立芸術会館での「カルメン」などが今でも記憶に鮮明に残っています。又県民オペラのバックを支える大分交響楽団も昭和40年第1回の芸術祭開会式にシューベルトの「ロザムンデ序曲」で開幕演奏をして以来、第3回の開会音楽会、第10回、第16回の閉幕行事としての特別演奏会の他第15回には共催行事としてベートーベンの「交響曲第九番」を演奏するなど、オーケストラ単独の演奏会の主要な催しが芸術祭と結びついています。





「フィガロの結婚」「ロザムンデ序曲」いずれも創成期の熱と意気こそあったものの、今思えば本当に拙い演奏でした。それから今日まで10数年、それなりの進歩・成長はあった様に思われます。県芸術祭20年の歴史はまさしく県民オペラ、大分交響楽団の歩みと重なるといって良いでしょう。いいかえれば、芸術祭があったから我々の活動もより積極的になり、技術的にも成長したといえるかもしれません。私個人としてもこうした活動の多くに指揮者として関わり育まれて来た事を感謝しています。又、県民演劇や県民バレエ、県民吹奏楽などの一連の合同公演にも音楽関係のスタッフとして参加し、他ジャンルの人と交流できた事も大きな収穫でした。ある年など3つの催しに関係して、あちこちの練習に顔を出すので芸術祭おとこなどとひやかされた事もありました。

そうして迎えた第20回の記念行事としての今回の「蝶々夫人」。途中でキャストの変更があったり、オーケストラも練習時間が十分とれなかったりして音楽的には不満足な点もありましたが、とにかく与えられた条件の中で全力をつくし、とにかく大役を果たした事でホッとしています。

県芸術祭も20年という節目を経て新たな展望のもとに運営をされていくでしょうが、今後は一層地域に根ざしたより質の高いものが求められていくものと思います。我々もその事を十分認識し、原点にもどった気持で大分県音楽文化のために一層努力しなくてはと考えています。

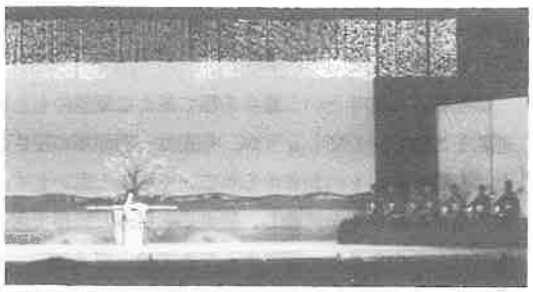
特集 20周年 記念行事によせて

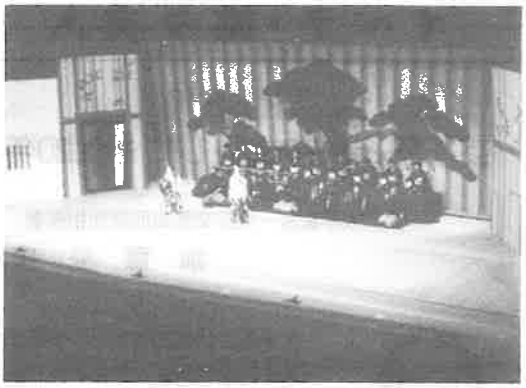
日舞・古典芸能観賞会

二豊の讃歌を高らかにうたいあげた群舞の見事さ

大分合同新聞社特信局部長
永松秀敏

〝花は散るゆえに珍しい〟と世阿弥の〝風姿花伝〟にある。日本の踊りも、また瞬時に消えゆく芸術であるだけに美しいと言えるのではなかろうか。千数百年の昔から、伎楽、舞楽、猿楽、能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎と受けつがれた日本の演劇の歴史は、〝舞い〟と〝踊り〟の歴史そのものであった。その延長線上に、今の日本舞踊がある。その日本の踊りがなぜ美しいのか。それは千数百年の伝統がはぐくんだ〝日本の型〟〝日本の色〟〝日本の音〟――が宝石のように美しく散りばめられているからにほかならない。その〝日本の美〟を支える大分県日本舞踊連盟（花柳笹之亟代表）が10月14日20回記念の県芸術祭主催行事（大分文化会館）で、二豊の讃歌を高らかにうたい上げた「豊の四季」を立ち方20人の群舞で見事に踊り上げた。豊の国の情緒ある風土を踊りで表現しようという趣旨の出し物だ。大和楽の原典を、歌詞は県詩人協会会長首藤三郎氏に補作をたのんだだけあって、早春の国東半島の仏たちからラストの豊後梅の開花まで、史跡や雄大な自然がきめ細かくうたい込まれている。





〝素（す）〟に近いと言っても、前割りのかつらに、倫子（りんず）にかすみ着箔、後見結びのシックな帯、手には朱に金ぱくの舞扇――というそろいの衣装。シックな日本の色が印象的だ。置き唄で、仏像の型の群舞から、古代文化の宇佐八幡をハスの花で見せ、別府八湯のゆけむりから、景勝に映える山と川、その母なる川、山国川、大野川への讃歌につなぎ、古戦場での豊後武士（もののふ）の大立ちまわり、秋のくじゅう高原の雄大な描写。ここは男性舞踊家3人の狸々舞の振りが、月の盃（さかずき）に寄せて格調の舞を見せる。

あとは吹雪の群舞から、いっきに、早春の豊後梅の開花につなぐ。終曲は未来を寿ぐ翁（おきな）を全員の群舞で支え、二豊の大地の揺ぎなき発展を祈って、印象的な幕切れとなった。

それに先立つ第一部は「古典芸能鑑賞」というタイトルにあるように、古典の原典にかえって「連獅子」「鏡山」「汐汲」「梅川」「関の扉」――といった古典の大曲を春・夏・秋・冬の四季を追って格調高く舞った。

日本舞踊連盟は結成26年という歴史があり、48年の「春夏秋冬」以来50年の「古曲に入りて」まで数回芸術祭開・閉幕担当の実績がある。2年に1回ペースでオリジナルものの大作に取り組んでいる。日本の伝統芸能の持つ、家元を頂点とする独得のタテ割り社会の中で流派を越えたヨコの連帯で新しいものを作り上げてゆく。全国的にも先進のことで評価はあっていいと思う。立ち方一人一人の精進もさることながら、別府検番による三味線音楽という各社中の存在が支えた功績も見逃がせない。この伝統空間は大分県の宝として大事にしてもらいたいものだ。

特集 20周年 記念行事によせて

第20回 県美展

年々増える鑑賞者・各部の充実と会場問題が課題

県美協副会長・芸振理事
仲町謙吉

今年の県美展は、旧県美協会（日洋彫工）と県書道協会と県写真作家協会の三者が統合して、昭和40年11月に第１回展を開催して以来20回目に当る記念の年である。県芸術祭も同じ年度の発足で、共に20回記念になる。県芸術祭20周年行事の一環として、20回県美展をより有意義にするため、「美を拓く大分」のテーマを掲げ、それぞれの分野より美的創造の道を探ることから、制作者の意識をたかめるとともに、一方鑑賞者にも表現の理解への糸口にとした。会は９月30日の前夜祭から始まった。20回にかける意気込みと、県美協を支え、共に大分に美を求める者の、共通の広場となったことはよかった。県美協名誉会員展の開催は県美展20回展の記念行事である。名誉会員（21名）のわずかな点数ではあったが、県美協を創り、支えてこられた先輩の作品展示である。書道部の会期中のみの１週間では短く惜まれる感もあった。

書道展と同時開催の名誉会員展

20周年記念県美展テープカット

もう一つの県美展記念行事は、「20周年記念感謝状の贈呈」である。県美展に賞等、発展にご協力いただいた32団体の方々に対し永年のご恩に報いるささやかな謝意を表わしたもので、今後一層のご協力を願うような事でもある。

展覧会の内容は、20回展にふさわしく盛り上りを見せた。搬入点数も、書道部が1,172点、写真部が929点、日洋彫工部が577点と各部共に増えている。会場は県立芸術会館が各部共主会場であったが、書道部は大分文化会館を第２会場としバスの運行をした。主会場の県立芸術会館が、狭ますぎるためのことである。日洋彫工部も、多数の落選作（不陳列作品）が出た。会場問題は今後の大きな課題である。会期の短さも問題である。各部共審査員の招へいには、作家や評論家と苦心され、今年の性格をつくりだしている。賞にも、20周年特別記念賞や芸術祭20周年記念賞・知事賞も６部門に設けられたことは展覧会を盛り上げた。陳列についても各部運営の妙が見られるが、尚一層のくふうが考えられなければなるまい。県内の巡回展も、書道・日本画・洋画の部のみで、書道が５会場、日・洋部が８会場となっている。このことも今後の検討課題である。鑑賞者が増大し盛会であったことはたのもしいかぎりである。

成人になった県美協の今後の問題は、内に各部の充実であり、主体的な研さんによる創作活動の盛り上りである。この活動を支え裏づけるものが、今後の文化基金の活用であり、成人としての県美協の役割を外に向って果たさなければならないときが近づいているように思われる。

特集 20周年 記念行事によせて

演劇・宇佐八幡炎上

県民とのつながりを感じさせる壮大なスケール

元文化課長
尾 登 一 信

中沢さんの倦くことなき創作意欲に敬意をはらって、何が何でもと出かけたわけであるが、その前に、私事にわたるが、わが家での会話から紹介しようと思う。

私の妻の実家が坂の市小佐井（大分市）の出である。前から「私の家の祖先を辿れば、緒方三郎という人らしいよ」と言っていた。記録や系図があるわけでもなく、たんなる言い伝えに過ぎないものではあろうが、「何かの縁だろうよ、観に行ったら」と奨めたところ、二つ返事で第１日の夜出かけて行った。帰って来て曰く「とってもスマートな演出だったわ。途中で少しくたびれたけど中沢先生ってやるわねえ」彼女のこれだけの言葉を予備知識として、2日目の夜出かけた。

今回私は全く先入観を持たず、一人の観客として、ただ１回見せていただいた。練習から何度も立合って、４回の公演も見、「本番がどうだった。何回目の方がよかった。練習時の演出の言葉が実っていた。出ていなかった……」といった批評助言も必要であろう。又、そんな方も仲間うちには沢山居られることと思う。然し、演劇とは舞台で人間が演ずるものを、観客がナマ身な人間として受けとめ、それをいかに感じて自分のものにするかということではなかろうか。そして、それはただ１回の勝負である。よかったからもう一度見ようという観客は極めて少ないとしなければならない。１回にした理由は以上のように考えたからである。

さて、見終った舞台であるが、壮大なスケールのおしばいであった。日本中世史そのものを背景にして、その

中で豊後の英雄緒方三郎惟栄を浮彫にし、大分県民との血のつながりを感じさせる。そうしたおしばいであった。

意図は痛い程よくわかった。然し、終始「中沢さんはこう考えたんだな。こんなことを言いたいんだな……」と、作者兼演出である中沢さんの立場で見ていた私を発見するのである。

荘園とは何だろう。在京荘園領主たる公卿と新しく抬頭した武士との関係は。緒方三郎がすい星の如く力を得て来たいきさつ、宇佐八幡がこの時代これ程までに影響を与える程強力であったのは、源平の確執と緒方三郎がはじめから源氏についたわけ、平氏は農民の敵だったのか、……。いろいろさまざまなことがこの歴史劇の中にすべて含まれている。語っても語っても語りつくせない程こみいったこの時代。……歴史を噛って来た私だけに感ずることの大なるものがあった。

緒方三郎と源義経の悲劇性は異質なものであろう。それが、鎌倉幕府成立の犠牲という糸で奇しくもつながれた悲劇の二重構造は、見る者の心をうってやまない。

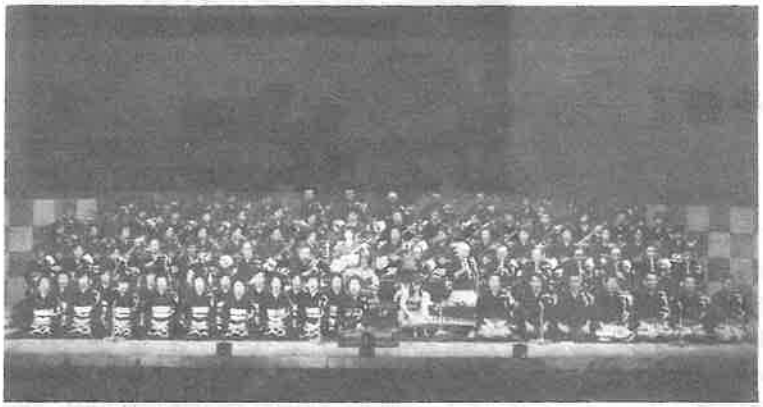
はじめから血のつながりをどこかに求めて見に行ったのは、私の妻を含めて、そう多くはなかったろうが、見終った観客の心の中に、緒方三郎がどのくらい近しい存在として留ることが出来たか、興味深いことではある。

鶴田恵子さんの琴は全くすばらしかった。ベートーベンの「英雄」も影が薄れたようだった。十時さんの極めて省略された装置、群読の意欲的演出、その外スタッフの協力はいつものことながら、さすがに県民演劇である。

又、来年どんな作品がみられるか、楽しみにしたいものである。

特集 20周年 記念行事によせて

民謡・ふるさとのうた



郷土民謡普及の力強い推進力

民謡研究家
大分県民謡緊急調査主任調査員
加藤正人

「一村一品を訪ねて」をサブタイトルに掲げた萬謡会の「ふるさとのうた」公演は、県芸術祭20周年の記念すべき節目にふさわしく大盛況裡に有終の美を飾った。

県下伝承民謡の集大成を志す私は早くから萬謡会を郷土民謡普及の力強い推進組織とみなして密接な連携をとり、各種公演ごとに郷土民謡の採譜編曲を幾多提供し、その歌唱・演奏に取り組んでいただいた。現在広く県内外で親しまれている郷土民謡の中の多くは、こうした実績の積み重ねによる所産だといっても過言ではあるまい。

今回の公演に当っても、杵築市納屋の「鯛しばり大漁祝い唄」をはじめ10曲ほどを提供したが、萬謡会員各位の熱心な取り組みにより、いずれの唄も普及に向って、めでたく晴れの門出をすることができ、その輝かしい前途を祝福してやまない。

平松県知事は、その著書「一村一品のすすめ」の中で「新しい産品だけを追い求める必要はない。埋もれたものの掘りおこし、または民謡でも観光開発でもよい。名のあるもの、全国の評価にたえるものを育てていただきたい」と述べられている。

全国的に民謡の盛行する昨今、一般の人々も民謡鑑賞の耳が肥え、それにつれて評価基準もぐっと高まったことは確かである。そうした中で、全国の評価にたえる郷土民謡を育てるとなると、並大抵の努力では果たし得ないだろう。

幸い県芸術祭は、郷土民謡についてみても、全国の評価にたえる唄を育てる絶好の契機であり、さらにその真価を広く世に問う権威ある公開の場でもある。

したがって、公演に際しては、舞台演出もさることながら、唄の一節一節の隅々にまで丹念に磨きをかけ、客席に深い感動を呼ぶ充実した歌唱・演奏することこそが大前提となることを忘れてはなるまい。

現在県下には、萬謡会のほかにも優秀な民謡団体が数多くあり、いずれもすばらしい活躍を続けている。今後それらの幾つかが互いに協力して芸術祭のメイン行事を主催する運びとなれば、郷土民謡の普及発展に一段と弾みがつき、豊の国づくりにひとしおの精彩を放つことになろう。

20周年特別記念行事

園田高弘ピアノリサイタル

大分が生んだ世界の巨匠

満席の音楽ファンを魅了

県芸術祭20周年を記念して本年は７つの記念行事を持ったが、期間最終日を飾って特別記念行事と銘打った、園田高弘ピアノリサイタルが11月30日（金）午後６時から芸館のホールで開かれた。芸術祭閉幕的意味もあって開会に先だち、平松知事のあいさつがあり、記念すべき20周年の盛りだくさんの行事にくぎりをつけた。

園田高弘氏は大分との関係も深く、父園田清秀氏は旧大分中学の出身で、東京音楽学校（現芸大）を卒業、滝廉太郎につぐ天才的音楽家といわれていた人である。園田高弘氏の今回の招へいは平松知事直々のもので、20周年記念の特別行事にふさわしい質の高い催し物であった。記念行事として「良いものを低料金で」の主旨にそってか当日は満席の状況で、多くの音楽愛好家を楽しませた。特に高校生・大学生など若い人達が多く、ピアノを身近にしている人達への大きな収穫であったようだ。

プログラムは「シューマンの蝶々、作品２」ではじまり、ピアノ小曲集的な幻想的で即興性の強い曲を、軽やかさと優美さでファンを魅了した。続いて、「シューマンの交響的練習曲、作品13」「ショパンの24の前奏曲、作品28」と、独特な高度の演奏技法を披露し、その曲想の質的な精神性と共に、大分が生んだ世界の巨匠にふさわしい、ハイレベルな演奏会であった。

没後一〇〇年 帆足杏雨展

芸術祭特別参加行事

大分が生んだ南画の巨匠、帆足杏雨展が芸術会館の主催で開かれた。大分県人でも竹田は知っていても杏雨は以外と知られていない面があり、杏雨没後一〇〇年にあたり、出品展数一〇〇点（他に資料など多数）の企画展は、その全貌を知る上からもすばらしい展覧会であった。杏雨は一八二四年（文政七年）田能村竹田に正式に入門し、南画家としての道を歩きはじめ、広瀬淡窓、帆足万里、頼山陽等に学問を学んだ。竹田没後、独自の画風を確立するが、がっしりとした岩山を中心に画面構成し、微妙に変化する細かい墨線と、明るさの強い色彩の使い方など、静寂な中にも、透明感を感じさせる独特の画風は、わが国の南画史上、大変ユニークな存在である。中央の展覧会だよりにもとり上げられ、大分芸術会館の企画展として高く評価された展覧会であった。

秋溪出雲図　一八五五（安政二年）

県内の文化施設

(9)杵築市民会館

県北テクノ圏域の文化ホールとして

杵築市は、国東半島の東の玄関口として発達した、田園都市である。

市を貫流する八坂川、高山川が別府湾に注ぐところに守江湾がある。東西15km、南北12kmのほぼ長方形をなし東は海に臨んでいる。総面積90.82㎢の大部分は火山岩に覆われる丘陵地で、市の周辺は300m～400mの山にかこまれ東に開いた半盆地形をなしている。特に南北2kmに及ぶ、白砂青松の住吉浜、東九州一を誇る奈多・行安・狩宿のキャンプ・海水浴場など美しい海岸があり、秋ともなれば、北に広がる丘陵一帯は1,425haに及ぶ黄金色のみかん園が連なり、まさに「観光とみかん」のまちで、海岸部にそそり立つ城山公園の一角に杵築市民会館と杵築城がある。

（市民会館のごあんない）

1　**規模**　建築面積　2,658㎡
　　構　造　鉄筋コンクリート造2階建
　　冷暖房　有り
　　収容数　大ホール（固定椅子）1,016席
　　小会議室　7室
　　管理人室　1室

2　**建築年**　着工　昭和40年2月12日
　　竣工　昭和40年10月20日

3　**用途**　大ホール　音楽会、講演会、演劇、舞踊、その他各種集会
　　会議室　会議、研修会、講演会等

市民会館の運営については、会館内の一室に杵築市中央公民館があり、館長・専任職員5名・管理人で運営しています。　（杵築市中央公民館長　竹森只雄）

大分の文化財（4）

熊野磨崖仏

（豊後高田市・国指定重要文化財）

国指定史跡と重要文化財の二重指定を受ける貴重なもので像高六八八センチの大日如来坐像と、八四五センチの不動明王坐像を主体とした磨崖物。右側の大日如来像は角張ったあご、への字に結んだ口など重々しく圧倒されるような力強さを感じさせ、平安前期の様式をしのばせる。左の不動明王は塑土を用い、上塗りに荒目を使っているのは県北の磨崖仏にはめずらしい。童顔でユーモラスな形相は大らかで、心暖かい大きさを感じさせてくれる。

大分県芸術祭20周年の

		第 10 回 （S49年）	第 11 回 （S50年）	第 12 回 （S51年）	第 13 回 （S52年）	第 14 回 （S53年）
主催行事		創作バレエ 朝日長者 大分交響楽団演奏会 特別記念行事 福田平八郎、生野祥雲斉をしのぶ作品展	箏・三絃・尺八による邦楽演奏会 三曲協会 県民演劇 宇佐耶馬台国女王卑弥呼	大分県のうた 合唱音楽の夕べ 民謡 大分県の祭りうた 祝いうた	県民オペラ カルメン 県民演劇 扉を開く人たち	日本舞踊 創作の会 県民吹奏楽 大分をうたう
共催（集中）行事	文芸	大分県短歌コンクール 第8回大分県俳句大会 第6回大分県川柳大会	第11回短歌コンクールと短歌を語る会 第9回大分県俳句大会 第7回大分県川柳大会	第12回短歌コンクールと短歌を語る会 第10回大分県俳句大会 第8回大分県川柳大会	第11回大分県俳句大会 第13回芸術祭短歌大会 第9回大分県川柳大会	第14回芸術祭短歌コンクール 第10回大分県川柳大会 第12回大分県俳句大会
	美術	第10回大分県美術展	第11回大分県美術展	第12回大分県美術展	大分の美術千年展 第13回大分県美術展	第14回大分県美術展
	音楽	音楽の夕べ 県民オペラ 吉四六昇天	音楽の夕べ 県職場音楽連盟 県民オペラ フィガロの結婚	都山流尺八九州連合大会 音楽の夕べ 県民オペラ 魔笛	第11回大分県職場音楽祭 竹の調べとふるさとの唄 第9回滝廉太郎祭	第12回職場音楽祭 秋をうたう 県民オペラ あまんじゃくとうりこひめ 第16回音楽コンクール本選
	舞踊		大分県洋舞踊協会 秋の公演	日本舞踊 素踊りの会 大分県洋舞踊協会合同公演	大分県洋舞踊協会合同公演 花と月とは点と線 —踊りの流れ—	大分県洋舞踊協会合同公演
	演劇	県民演劇　大友宗麟 大分県演劇祭	大分県演劇祭	県民演劇 貧乏神、山弥長者物語 大分県演劇祭	大分県演劇祭	県民演劇 白秋を恋した女 大分県演劇祭
	児童文化					第15回大分県児童文化祭
	総合				大分県高等学校中央文化祭	第3回大分県高等学校中央文化祭
全参加行事数		68	56	70	84	105

あしあと

（1回～9回までは「芸振」№24
S.49年、9月発行10周年特集号に掲載）

第 15 回 （S54年）	第 16 回 （S55年）	第 17 回 （S56年）	第 18 回 （S57年）	第 19 回 （S58年）	第 20 回 （S59年）
県民演劇 ふるさとが燃える （大分公演・佐伯公演） 第16回大分県児童文化祭 ふるさと大分	舞　踊 おおいたの祭り 大分交響楽団特別演奏会	民　謡 ふるさとのうた 日本舞踊 古典に入りて	県民演劇 豊後みゅーじかる 炭焼長者臼杵石仏物語 県民オペラ ジュニアーフェスティバル	民謡オペレッタ おさん狐 県民オペラ コシ・ファン・トウッテ	記念行事 ・記念式典、文芸講演会 ・県民オペラ 蝶々夫人 ・日舞、古典芸能観賞会 ・第20回県美展 ・県民演劇、宇佐八幡炎上 ・万謡会、ふるさとのうた 特別記念行事 ・園田高弘ピアノリサイタル
第15回芸術祭短歌コンクール 第13回大分県俳句大会 第11回大分県川柳大会	第16回芸術祭短歌コンクール 第14回大分県俳句大会 第12回大分県川柳大会	第13回大分県川柳大会 第17回芸術祭短歌コンクール 第15回大分県俳句大会	第18回大分県短歌大会 第16回大分県俳句大会 第14回大分県川柳大会	第19回大分県短歌大会 第17回大分県俳句大会 第15回大分県川柳大会	第20回大分県短歌大会 第18回大分県俳句大会 第16回大分県川柳大会 20周年記念俳句作品展
第15回大分県美術展	第16回大分県美術展	第17回大分県美術展	第18回大分県美術展	第19回大分県美術展	
第13回職場音楽祭 あなたと共に 大分交響楽団演奏会第九コンサート 第7回音楽コンクール 県民オペラ 赤い陣羽織 第13回県吹奏楽フェスティバル	第8回県音楽コンクール 県民オペラ　ヘンゼルとグレーテル 第14回職場音楽祭 音楽の夕べ 第20回定期邦楽演奏会 大分県吹奏楽フェスティバル	第15回職場音楽祭 音楽の夕べ 吉丸一昌記念演奏会 第9回県音楽コンクール 大分県音楽協会演奏会	第16回職場音楽祭 音楽の夕べ 第10回県音楽コンクール 名作オペラハイライト公演 都山流尺八九連演奏会 大分交響楽団演奏会	第17回職場音楽祭 音楽の夕べ 第11回県音楽コンクール 大分県音楽協会演奏会	第12回県音楽コンクール 大分県吹奏楽フェスティバル 第18回職場音楽祭 翔べ大分発表会 大分県音楽協会演奏会
大分県洋舞踊協会合同公演			大分県洋舞踊協会 第21回合同公演	大分県洋舞踊協会 第22回合同公演	
大分県演劇祭	県民演劇　童話劇 森の小人 戦後別府物語 星の流れに	県民演劇 白い雲がとぶよ 第34回大分県高校演劇祭	第35回高校演劇祭及び研究大会	県民演劇 旅鴉の三太郎 第36回高校演劇祭	第37回高校演劇祭及び研究大会
		第17回大分県人形劇フェスティバル	第19回大分県児童文化祭	第20回大分県児童文化祭	第21回大分県児童文化祭
第4回大分県高等学校中央文化祭	第5回大分県高等学校中央文化祭	高文連30周年記念中央文化祭	第7回大分県高等学校総合文化祭	第8回大分県高等学校総合文化祭	第9回大分県高等学校総合文化祭
85	97	109	112	108	123

れんさい

スバルと人（その4）

菅　久

スバル第三回展は二十五年六月、トキハ三階で大々的に開かれた。それは田中昇、村田収巧氏ら五人の会員増による作品の量とバリエーションである。中でも岩尾秀樹、荒金透両氏と菅久の三人が、別府市で発表するグループ「ネギ」からの参加で一層拍車をかけた。

ネギグループは二十四年から別府市在住または在職の二十代前半の若い絵かきが、肉のないネギだけのスキヤキを囲んで画論を戦わせたことから「ネギ」と命名、二十五年一月に別府市流川西尾百貨店で第一回展を開いた。この第一回展の評判がスバルの知るところとなり交流が始まる。

最年長二十五歳の岩尾秀樹氏を中心に荒金透、菅久、矢岡勲、松山直、三浦直彦の六名が創立同人。二回展を八月に市内楠木町の中村デパートで開いた時は、さらに江藤明、菅玲子そして日本画の岩沢重夫各氏も参加、翌三回展は大分市へ進出トキハで開いた時、市原康孝氏も入ったがその後解散。ネギ同人はスバル六回展に江藤、菅玲子、矢岡、七回展に市原の各氏も加入してネギをスバルが吸収する形となった。

ネギグループはキュビズムの仕事をしていた岩尾氏（別二高）の影響が大きかったといえる。鏡の前の玉葱の静物、蓮の葉、山腹といったモチーフをよく描いて国展に出品、連続受賞して鬼才とうたわれた。荒金氏（キャンプ勤め）は自由美術展に出品していたが、当時大作と思える三十号の画面いっぱいに大きく壺一つを描き、青の透明感のある色の中に壺のボリュームと質感を出し不気味な美しさで人を驚かした。矢岡氏（北小）は独立展にキュビックな風景画が入選、のち国画会に転向したがテクニシャンであった。松山氏（王子中）は東京美校を卒業したばかりでデッサン力があり、デフォルメした人物画が記憶に残る。三浦氏（別二高）も教育大卒業直後、別府市の父のところにきて就職、賢実な画風で努力。菅久（別一中）は描象化をつづけ、第二回ネギ展に出品の風景「No.5」が二紀展に初入選した。

二回展からの江藤氏（明治小）は最年少で神経の行きとどいたキュビズムでがんばっていた。菅玲子（中島小）はもっぱら人物画で、モヂリアニの研究。岩沢氏（京都美大学生）は洋画的モダンな日本画。三回展の市原氏（別三中）は自由美術展出品でマチエールの変化ねらう幾何学的描象画。

以上簡単にネギ同人の画風を紹介したが、当時としては終戦後の開放の中で自由と若さが売りものであった。寸暇を惜んでデッサンをし、徹夜で制作しつづけていた岩尾秀樹氏の姿を思い出す。

こうしてネギの雰囲気をそのままスバルに持ちこみ、スバルに新風を吹きこんだ最切がスバル第三回展である。「細田知事も会場に顔をみせ記録的な観覧者でにぎわった」と広瀬氏の覚書にもある。

（芸振理事、県美協常任委員）

※訂正＝「スバルと人（その2）」のスバル会同人一覧表の中で、三期七回展（二十九年）荒木剛、中条正一、小野百合子はいずれも◉が正しい。

文化ニュース

□辛島武雄芸振副会長11月30日逝去（76才）、謹しんでご冥福をお祈りいたします。

□マリー・ローランサン 展1.5～2.3　大分芸術会館

□つみ木座公演1.23　18：00　大分芸術会館

□エリック・ハイドシェックピアノリサイタル（フランスが生んだ名ピアニスト）1.29　18：30　大分芸術会館

□所蔵品展Ⅳ　1.5～2.3（高山辰雄、正井和行ほか）　大分芸術会館

□芸館親子劇場　2.24　10：00　少年王・マチウシ　大分芸術会館

編集後記

芸振20周年の特集号として会報「芸振」の増ページをすることになった。まず各ジャンル毎に20年をふり返ってもらった。それなりの歩いてきた道の変遷が尊いものに思える。記念行事については、その道のエキスパートの方々に、それぞれ感想なり、思いを語ってもらった。

20周年の記念行事にふさわしい、すばらしい内容とスケールを持っていたものばかりであった。最後にぜひ記録として残しておきたかったものに、過去20年の県芸術祭行事一覧がある。紙面の都合で第1回から載せられなかったことが大変残念に思っている。（T）

発行所・大分市府内町県教育庁文化課内県芸術文化振興会議事務局・印刷大分プリント社・題字野田南圃